



ヘティスはアンドレア・エスメラルダからヒーリングを習うが、そこから過去の世界へタイムスリップし、今度は逆にエスメラルダにヒーリングのレッスンをすることになった。

ヘティス

「healing（ヒーリング）の heal（ヒール）という言葉の語源は全体（whole）という意味なの」

「で、この宇宙の物質の全てはプラクリティっていう母なるエネルギーからできているの」

（とりあえず、エスメラルダ先生の言ったことをそのまま言ってみるわ・・・）

「全てはそこから流出したの。だからね、例えば、あなたの嫌いな人がいるじゃない？けど、それって元を辿れば同じなの。もちろん、アナタが好きな人もよ。ヒーリングは表面的な好き嫌いを超えた、そんな純粹で平等な愛の気持ちで祈る、これが基本になるの」

「そうすると、その根本エネルギーと感応して、それが癒しのエネルギーになる・・・」

ヘティスはエスメラルダから習ったことの全てを、そのままエスメラルダに伝えた。

エスメラルダ

「へえー、さすがメーティス先生！すごい知識ですね！」

ヘティス

「あはは・・・、そうかな・・・」

（これはもう、どう反応していいかわからないからちょっと困るわ・・・）

エスメラルダ

「ところで、メーティス先生の先生はどなたなのですか？」

ヘティス

「えっ・・・？私の先生・・・？」

（こ、これはどう説明すればいいの・・・？）

エスメラルダ

「きっと素敵な先生なんでしょうね！」

ヘティス

「あはは、まあね・・・」

「けど、少し前に死んじゃってね・・・」

（もし、その人に習いたいとか言い出したら大変よね！ってことで、もうこの世にはいないって設定よ）

エスメラルダ

「そうなんだ、なんて名前の方なの？」

ヘティス

（もう、なんで名前なんか知りたがるのよ？）

「えーと、えーと、えーと」

「深緑のヒーラーって呼ばれてた。名前までは知らないわ！」

エスメラルダ

「へー、蒼き魔術師みたいね。そう呼ばれているなら高名な方なのね」

ヘティス

「まあ・・・、そうかな？」



ヘティスは少し冷や汗をかいてきた。自分が変なことを言って未来が変化してしまっ  
いけないと思ったからである。

ヘティス

「とりあえず、アンちゃんが今着ている黄色のローブも素敵だけど、緑のローブも似合  
うんじゃないかなあ？」

エスメラルダ

「うん、私、緑好きよ」

ヘティス

「じゃ、私が緑のローブを作ってあげる！」

ヘティスはヘパイトスを呼び出そうとするが、ヘパイトスがいない。  
オオタネコの治療院を歩き回ると台所にいた。

ヘティス

「あれ、エウちゃん！」

そこには女性ゴーレムのエウリュノメーがいた。未来のエウリュノメーは魔法の半減期が  
来て、土に帰っているが、ソバージュの茶色い髪、美しい顔立ち、その姿は、まさしくエ  
ウリュノメーだった。そして、その側にヘパイトスがいた。

エウリュノメー

「はい、エウリュノメーと言います」

ヘティス

（エウちゃん、こんなに前からいたのね・・・ゴーレムってずっと若いままで歳とらない  
のね）

（一応、自己紹介しておこっと）

「私はメーティス、よろしくね」

エウリュノメー

「メーティスさん、よろしくおねがいします」

ヘパイトスは外から花を持ってきている。

エウリュノメー

「私、お花はいりません」

ヘパイトス

「だって、キミはお花がとても好きなはずだよ」

エウリュノメー

「いらぬものは、いらぬ」


ヘパイトス

「どうしちゃったの・・・ボクだよ、ヘパイトスだよ。小川を一緒に見たよね？」

エウリュノメー

「そんなの知りません」

「私、アナタを知らないし」



「今、皆さんが食べた後の片付けをします。あちらへ行ってください」

未来ではエウリュノメーはヘパイトスに恋をした。しかし、それは、多くの人が彼女をゴーレムとして扱っていて、ヘパイトスだけが女性としてエウリュノメーを見ていたことにある。まだ、この頃、エウリュノメーは経験が浅いため、その比較ができず、ヘパイトスのオモイの貴重さがわからないのかもしれない。

と、ヘティスは思った。

ヘティス

（確かに、ここでエウちゃんが恋や愛に目覚めちゃったら、あの未来のエウちゃんはないのかもねえ）

（とりあえず、ヘパはに可哀想だけど・・・）

と、思って、ヘパを部屋に連れて行った。

部屋に帰ってヘパイトスの3Dプリンターで緑色のローブを作った。そして、そのローブをヘティスはエスメラルダに渡した。エスメラルダはすぐにそのローブを身に纏った。

エスメラルダ

「キャア、このローブ、可愛い！」

ヘティス

「蒼き魔術師さんに見せたら、彼もアナタにメロメロよ〜！」

エスメラルダ

「やだ、先生、からかわないでください！」

ヘティス

（あのエスメラルダ先生にもこんな時代があったのね）

（それにしても、このローブ、未来のエスメラルダ先生とほとんど同じね・・・。何十年経っても朽ちない素材で作ってあるし、もしかしたら・・・。歴史の織り込みって、どーなってるのお〜）

「このローブを着ていれば、きっといいことあるからw」

エスメラルダ

「はい、ありがとうございます、メーティス先生w」

それからヘティスは若き日のエスメラルダにヒーリングの技術を伝授した。それは深夜にまで及んだが、エスメラルダはやはり天性のヒーリングの才能を持っており、そこでヒーリングの基礎が開花した。

ヘティスはその夜、輪廻というものがあつたら、前世の先生が弟子だったり、それが来世では逆だったりすることもあるのかな、と思いながら、眠りの世界へと入っていった。